あとがき

梅原　賢一郎

ここに「芸術学研究６」ができあがった。集録の論文四本と研究ノート一本は、年度はまちまちではあるが、芸術学コースの卒業生が書いたものである。いずれも、在籍時の卒業成果物（卒論）もしくは進学先の本学大学院の修士論文をもとにしている。

佐藤論文は、渡辺崋山の《一掃百態図》についてのものである。「古風俗画」の引用元をたどり、それをどのように入手したのか（重模であっても）、なぜそれを選んだのか、などの考察をしながら、崋山をとりまく社会的な状況をふまえて、崋山の風俗画の特徴をあぶりだそうとするものである。

辻野論文は、鈴木其一の《朝顔図屏風》について、他の朝顔図との比較、注文主の推理、当時の博物学的な知のあり方など、多面的に論じながら、「場を演出する仕掛け」として、論を収斂させていくものである。あわせて、日記から其一の交流関係を丹念にたどって整理した〈表〉や〈作品リスト〉は、地道な作業として評価することができるであろう。

吉岡論文は、藤田嗣治が晩年にフランスのランスに建設した「礼拝堂」について論及したものである。論末に付録された「礼拝堂関連年表」は、「日記の記述」「礼拝堂進捗状況」「その他の活動」を年代順に平行的に並記させたもので、丹念な作業のあとをうかがうことができる。

木村論文は、肢体不自由児の芸術活動について、現場での経験から、一つの視座を提示するものである。一人一人に合わせて木村によって制作された「ホルダー」や「斜面台」の写真が輝かしい。

渡辺の「研究ノート」は、河鍋暁斎の評価の変遷を、明治期から近年にいたるまでのおもだった美術史（絵画史）の書籍をたどることによって、〈表〉にして、明らかにしたものである。丹念な基礎作業のあとをうかがうことができる。

最後に、梅原論文である。範を垂れないといけないにもかかわらず、量を大幅にこえてしまった。二分三分にするといっても、隔年の刊行物にはふさわしくない。仲間に特別な許しをいただいて、全体を掲載させていただくことにした。『正法眼蔵』のもう一つの読み方を提示するものである。

全体として、まだまだいたらない点などままあると思われるが、広く、ご批判ご鞭撻をたまわりたいと思う。